

## 『ミカンの味』

チョ ナムジュ／著 矢島 暁子／訳  
朝日新聞出版（2021年）

幼なじみとの関係が突然終わり傷を抱えるソラン、成績優秀ながら病弱な妹に親の関心を奪われいつも寂しいダゴン、事業に失敗した父親に苛立つヘイン、理由なく親友に裏切られた過去を持つウンジ。それぞれの事情を抱える彼女たちは中学の映画部に所属し、「いつも一緒にいる4人」と言われるほど仲良くなる。そして中学3年生になる直前、済州島に旅行に行った4人はある約束を交わし、その証としてタイムカプセルを埋める。この約束を軸とし、それぞれの生い立ちと現在を交互に語られ、約束をめぐり次々と事件が起こる。

## 『教室に並んだ背表紙』

相沢 沙呼／著  
集英社（2020年）



中学生の時、図書室は利用していましたか？クラスメイトに馴染めず、居場所を探して辿り着いた図書室。本は読みたくないけど、課題の感想文を調べるために踏み込んだ図書室。名前をいじられ続け、誰にも自分を出せずにいる少女。彼女たちは様々な事情で図書室を訪れます。司書のしおり先生と関わり、少しずつ変化していく心模様が丁寧に綴られた全6編の連作短編集です。作者の著書は、この本以外にも「雨の降る日は学校に行かない」「小説の神様」が、中学入試の国語で出題されています。

## 『お探し物は図書室まで』

青山 美智子／著  
ポプラ社（2020年）



お探し物は、本ですか？仕事ですか？人生ですか？悩める人々が立ち寄った小さな図書室。性別も年齢もバラバラな5人が、無愛想だけれど聞き上手な司書に悩みや願望を吐露し、おすすめの本を紹介してもらいます。想像通りの本から、悩みには関係ないのでは？と思われる本まで様々な本が出てきます。それだけではなく、可愛い付録もついてきます。本を通じて、悩みや願望、そして自分自身と向き合っていきます。みなさんも思いもよらない本と出会うために図書室に行ってみたくなるかもしれません。

## 『雪のなまえ』

村山 由佳／著  
徳間書店（2020年）



小学生の雪乃は、いじめにあって不登校になってしまいました。そんなある日のこと、なんと雪乃の父が突然仕事を辞め、田舎暮らしをしたい、と申し出しました。父とともに曾祖父母のヨシばあばとシゲ爺の家で暮らすことになった雪乃ですが、引っ越した先の学校にも、なかなか通うことができません。畑仕事を手伝いながら、自分と向き合う雪乃が出した答えとは…？

周囲の人々に温かく見守られながら前を向き始める雪乃と、みんなを巻き込みながら長野の田舎を盛り上げたいと奮闘する父の姿に注目です。

## 『大きくなる日』

佐川 光晴／著 集英社（2016年）

四人家族の横山家を中心に、どこにでもあるような町のいろいろな家族の成長物語です。

お世話になった保育園の先生や友達とのお別れの話や、部活での人間関係の話、勉強がしたいと言って中学受験をさせてもらったが、その学校に馴染めず勉強がおろそかになってきた女の子の話など、読者である私たちにも身近に感じられる話が多く載っています。フィリピンから義母の介護のため日本にやってきて文化の違いや友達がなくてさみしい思いをしているお母さんの話は、多文化共生について考えるきっかけになるとと思います。

## 『デューク』

江國 香織／文 山本 容子／画  
講談社（2000年）



私のデュークが死んでしまった。デュークは、グレーの目にクリーム色のムク毛をした牧羊犬でした。デュークがまだ子犬だったころの特別可愛い仕草や、好きだったものなどが次々に思い出されて、主人公は電車の中でも涙が止まりませんでした。人目も<sup>はばか</sup>憚らず号泣していると、一人の少年が電車の席を譲ってくれました。少年が声をかけてくることはありませんでしたが、さりげなく満員電車の人ごみからかばって来ていました。終点でおりた主人公は、一緒におりた少年にコーヒーをごちそうすることにしました。